

蔵原伸二郎『岩魚』再論

—副島次郎関連詩を視座にして—

岩本 晃代*

要旨

蔵原伸二郎の生前最後の第七詩集『岩魚』（昭和三九年）は、彼の詩業の到達点として高く評価され読売文学賞を受賞した。なかでも冒頭の《狐》章六篇には、『東洋の詩魂』（昭和三十一年）で展開された宇宙感覚を基盤とする彼の詩学が見事に定着しており、優れた抒情詩として広く知られている。だが、彼は戦時下の詩業によって「戦争詩人」のイメージを強く持たれている詩人でもある。本稿では、『岩魚』の中では従来ほとんど注目されていなかった中央アジア探検家副島次郎に関する詩篇を視座に、『東洋の満月』から『岩魚』に至るまでの詩精神の新たな一面を明らかにした。さらに、「戦争詩人」のレッテルを貼られた背景について、戦時下での出版事情をふまえて考察した。

キーワード

蔵原伸二郎 『岩魚』 副島次郎 『東洋の満月』 『成吉思汗實録』 「戦争詩人」

一、はじめに

拙著『蔵原伸二郎研究』（双文社出版、平成一〇年一〇月）では、『東洋の満月』（生活社、昭和一四年三月）から『定本岩魚』（詩誌「陽炎」発行所、昭和四〇年一二月）までの詩精神の軌跡について、主として時間意識を視座に考察した¹⁾。戦前の直線的・垂直的な時間意識によって大きく戦争賛美詩へ傾斜した詩人は、戦後、無の認識の獲得によって立体的な時間意識を基盤とし、自然や生命愛の詩境へと到達した。それは戦争期を経て、長い苦悩と沈黙の後に大きく転換したものである。けれども、『東洋の満月』期に、後者のような詩世界が全くなかったわけではない。「胡瓜の歌」（『東洋の満月』『乾いた道』）に代表されるように、戦前から戦後まで、単行詩集に再録される詩もある。

大岡信は蔵原伸二郎の戦争詩集『戦鬪機』（鮎書房、昭和一八年七月）『天日の子ら』（湯川弘文社、昭和一九年三月）について、『東洋の満月』に内在していたアジア主義的心情が、詩人の、それはそれとして純粹であった慷慨の精神の昂ぶるままに、奇妙

*崇城大学総合教育センター教授

な屈折をみせ、痛ましい失墜を示すにいたる過程」ととらえてい
る。さらに「奇妙なことに、蔵原は同じころ、ずつとのちに『乾
いた道』に収められることになる「乾いた路」のような、良質の
抒情詩をも、たくさん書いていたのである。この詩人の慷慨詩は、
それらの抒情詩（これは『乾いた道』や『定本岩魚』の、あのす
ぐれた抒情の世界へとまっすぐにつながっているものだ」と、ま
るで水と油のように分離して共存していたかのようなのである。」と、
戦時下の詩精神が二極化していたことを示唆し、戦時下の作品を
分析することによって「晩年の幽玄体の詩の起源」が明らかにな
るとの鋭い指摘をしている。⁽²⁾

拙著では、戦時下の蔵原伸二郎の詩精神の特徴について、阿蘇
神社の直系という出自による血統意識と、急激に硬直化した時間
意識に着眼し、虚構と現実の距離が消失して同じ平面上に共存し
ていると述べた。「新しき世界」（『戦闘機』）は、原始と現在、虚
構と現実の交錯する世界であり、『東洋の満月』の〈幻想的リア
リズム〉が変質していく過程には、確かにそれらを認めることは
できるだろう。

しかし、大岡論が提示した「幽玄体の詩の起源」という観点か
ら、改めて蔵原伸二郎の詩歴を辿りなおしてみると、「すぐれた
抒情の世界へとまっすぐにつながっている」東洋に憧れる浪漫精
神の源流について、より掘り下げてみる必要があると思われる。

戦前・戦中期の蔵原伸二郎の詩風には、いくつかの特徴がみら
れる。萩原朔太郎の影響が濃いもの、直線的な時間意識によって
〈原始〉を志向するもの、故郷阿蘇をうたったもの、自然物その
ものをモチーフにしたもの、そして読書体験によって得たアジア
への憧憬をうたったもの等である。もちろん一篇中にモチーフが
混在しているものもあるが、拙著においては、読書体験による浪

漫的な〈東洋〉観の形成の考察が十分でなく、拙稿「蔵原伸二郎
『東洋の満月』再論」（『崇城大学紀要』第四〇巻、平成二七年三
月）において、拙著刊行時には見落としていた資料をもとに、新
たな視点から蔵原伸二郎の詩世界を照射し、当時の民族意識の特
質について再考した。⁽³⁾ 本稿もまた、かつての『定本岩魚』論
ではひき出せなかった詩精神の一面を追究することを目的とする。

二、詩「砂漠」と『岩魚』

読売文学賞を受賞した蔵原伸二郎の第七詩集『岩魚』（詩誌
「陽炎」発行所、昭和三九年六月）は、『狐』章六篇、『岩魚』章
七篇、『岸辺』章七篇、『五月の雉』章八篇、『子守唄』章五篇、
計三十三篇から構成されている。

刊行当時、とりわけ『狐』章題下六篇の完成度の高さが話題と
なった。同詩集は後に慶應義塾大学時代の同級生であった石坂洋
次郎に「ある詩集」（『別冊文藝春秋』昭和四一年三月）という短
編を書かせ、「目の膜がはがされたように、蔵原の詩の一行一行
が、私の脳裡に鮮明に強烈に灼きつけられた」とまで言わしめた
ほどであった。⁽⁴⁾

拙著においても、『岩魚』については、『乾いた道』から引き継
がれた戦後詩と、「めぎつね」「黄昏いろのきつね」「おぎつね」
「きつね」「老いたきつね」「野狐（やこ）」六篇としてまとめら
れた『狐』章の分析が主となっている。⁽⁵⁾ その際、蔵原伸二郎の遺
志によって編集しなおされた『定本岩魚』を底本として考察をし
た。

『定本岩魚』は、『岩魚』から「やもり」「貝塚」「山道」「崑
崙」「砂漠」「心象風景」の六篇が削除され、詩集『乾いた道』か

ら「卵のかげ」「生命のかげ」「晩秋」「時間は消える」「雪」「しずかな秋」の六篇が《卵のかげ》章として詩集の最後に追補された。また拾遺として「秋」「足跡」二篇が加わり、計三十五篇となったものである。

本稿では、『岩魚』を底本とし、『定本岩魚』から削除された詩「砂漠」「崑崙」をはじめ副島次郎との関連詩に着目をした。

『岩魚』の「後記」には、「砂漠」等を収録した編集の意図が著者自身によって次のように記されている。⁶⁾

この詩集「岩魚」には私の五番目の詩集「乾いた道」以後の作品の中から約三十篇を集めた。その他二篇を既刊詩集から再録し、「崑崙」「砂漠」「山道」「貝塚」の四篇は選集や文学全集などに掲載されながら未だ自分の詩集に入れてなかつたもので、ここに修正をほどこして収録することにした。

(引用部の傍線は筆者岩本による。以下同。)

実際には、「崑崙」は『戦闘機』(鮎書房、昭和一八年七月)に、「砂漠」「貝塚」は『旗』(金星堂、昭和一九年三月)に、所収されている。ただし「砂漠」は戦前は「旅人」という題名であった。著者の思い違いか、あるいは、この戦中期の二詩集を「自分の詩集」として数えなくなつたのかどうかは判然としない。だが、戦後十九年を経て、集大成として刊行した詩集に、この四篇を収録した意味は決して小さくはない。

本節では、「砂漠」を手がかりに詩集『岩魚』をとらえなおしてみることとしたい。まず本文を全文引いておこう。⁷⁾

砂漠

あれはてた
朔北の野を
歩いてゆく

一人のたびびとがあつた

その精神は天空のように広い

だが彼の姿は

怪奇な岩山のふもとを這う

一匹の蟻であつた

日夜、松の木は岩の上で鳴り

無人の道には古い人骨があつた

ラクダの骨もあつた

歴史の消滅した空間

ひとりでに変貌する砂丘

白骨は年々歳々虚無の風に磨がかれた

灰色狼や秃鷹の群もハイエナも

この道から姿を消してから数千年

ここには一度も雨がふらなかつた⁸⁾

時たま

小さな白雲があらわれるが

たちまち消えた

大雪山脈ははるか地平にきらめき

屈折した千年の道も今はなく

毎日毎日ただ砂丘ののぼり下りである

旅人は背中に小さな日章旗をたてて

ただひとりこの絶域を歩いていった

旗がひゅうひゅうとたえず 砂嵐に鳴っていた

それは日本のふる里の古い笛の音であった

それは故郷に残した母の声であった

このたびびとは

ついに帰らなかった

この詩の舞台は中国北方の辺境（朔北の野）、チベット高原の東を南北に走る（大雪山脈）である。日本人である（一人のたびびと）は、〈数千年〉（一度も雨がふらなかった）荒涼たる砂漠を旅し、〈背中に小さな日章旗をたてて／ただひとりこの絶域を歩いて〉いる。この〈たびびと〉は実在の人物をモデルにしたと認められる。

「砂漠」の先行研究は、管見の限り、竹長吉正「蔵原伸二郎『砂漠』の素材と意図」（『解釈』昭和五五年一〇月）があるのみである。竹長吉正は、「砂漠」の校異を分析し、そこから『戦闘機』所収の「志士の歌」の（志士）のモデル副島次郎に言及している。さらに「砂漠」と「志士の歌」との差異について、前者は「副島次郎が中央アジアの砂漠を行くのになぞらえて、蔵原自身が故郷の阿蘇に帰っていかうとしたのだと解される」詩だと述べ、後者は「悲憤慷慨・戦争正当化」の詩だと述べている⁹⁾。

竹長論は、『岩魚』を新たな視座から分析し、副島次郎に言及している点で非常に示唆に富んでいる。しかしながら、「砂漠」の成立過程の分析に誤りが認められる。さらに中央アジアへの憧憬が蔵原伸二郎の故郷阿蘇への郷愁と結びつけられている点に論拠が乏しい。

まず成立過程から考察してみる。竹長論では「砂漠」の原題

「旅人」が初出「日本談義」（昭和一五年一月）、『現代日本年刊詩集』（昭和一六年七月）を経て、「砂漠」と改題されて『岩魚』に収められたとし、その校異を丹念に記している。そのうえで、異同について「いずれも大幅なものではない」とし、「これらの校異を通して、まず言えることは、蔵原詩の場合、推敲に推敲を重ねるにしたがって、行数がふえていっていることである。初出「旅人」||全一連25行、年刊詩集「旅人」||全一連27行、「砂漠」||全二連32行、というぐあいである」と述べている。だが、改めて調査してみると発行年月順に新たな所収詩集も含めて次のような結果が得られた。

- ・「旅人—副島次郎中央アジア横断日記による」（『日本談義』昭和一五年一月）||全一連25行
- ・「旅人」（『コギト詩集』山雅房、昭和一六年六月）||全一連30行
- ・「旅人」（『現代日本年刊詩集』山雅房、昭和一六年七月）||全一連27行
- ・「砂漠」（『岩魚』詩誌「陽炎」発行所、昭和三九年六月）||全二連30行

蔵原伸二郎には『東洋の満月』所収の「胡瓜の歌」「虎」のように、改稿のたびに、アンソロジーや『乾いた道』（蕃薇科社、昭和二九年五月）等の単行詩集に所収した詩篇がある¹⁰⁾。この「旅人」から「砂漠」への過程でも推敲の跡が認められるが、竹長論でも指摘されているように大幅なものではなく詩の内容にさほど影響するものでもない。ただし行数の変化については、竹長論の「推敲に推敲を重ねるにしたがって、行数がふえていっている」

という指摘は明らかに間違っている。「砂漠」は全二連30行（一連目20行、二連目10行）である。

むしろ、ここで問題にしなければならないのは行数の変化ではなく、初出にはあった副題「副島次郎中央アジア横断日記による」が削除され、戦後に「旅人」から「砂漠」へと改題されたことである。

戦中期の戦争詩集によって、「戦争詩人」というレッテルを貼られた蔵原伸二郎は、戦後、中央詩壇から離れて苦悩の日々を過ごした。長い沈黙を破って刊行した『乾いた道』の巻頭詩は「たびびと」（初出『文芸春秋』昭和二十七年八月）である。「地球生成のかげを 辿って／あるいてゆく 人がいる／永久に 空っぽの ルックを 背負い／やぶれた 認識の シャツポを かぶり／露出した 観念の 岩と岩の間を／秋天に 浮かみ出たり また隠れたり／／こんな わびしい 涸渇の道を／その人は 一人で あるいている」——この詩は、明らかに先の「旅人」を下敷きとしたものであり、戦後においてはかなり抽象化されて、明るい二ヒルを漂わせている。¹¹⁾しかし一方で「旅人」の詩の本質は「砂漠」にほぼそのまま受け継がれている。実在のモデル副島次郎の影響は、固有名詞は削られていても、戦後まで及んでいるといえるだろう。「砂漠」の成立過程の考察は、蔵原伸二郎の晩年の詩世界への軌跡を辿るうえでも重要である。

三、副島次郎の著作の影響

前節で述べたように、戦前から蔵原伸二郎は、副島次郎に、詩の副題として掲げるほどの深い関心を持っていた。副島次郎とはどのような人物だったのだろうか。竹長論では「副島次郎につい

て、私は多くのことを知らない」、「しかし、蔵原は彼に相当大きな影響を受けている」とのみ述べられていて、それ以上の言及はない。同時代の詩人田中克己は『コギト』の思い出に「『東洋の満月』について、「中央アジアの曠野の趣きなど雄大でしかもこまかい描写がわたしたちを喜ばしたが、衛藤藩吉教授の御教示によると、若くして死んだ副島次郎氏の『中央亜細亜探検記』を愛読したあとがあるという。」と記している。¹²⁾だが、副島次郎の著作の影響についての詳しい論考は現在のところないようである。明治二十九年九月二〇日、佐賀に生まれた副島次郎は、明治四二年に佐賀中学に入学したものの病気のため明治四五年に退学。大正四年、二〇歳で満州に渡り、大正九年に一旦帰国するまで中国各地を転々とし、再び渡満した後、大正一一年に、天津の邦字紙「京津日日新聞」の記者となる。中央アジア調査旅行を志し、大正一三年一月一日、北京を発った。その旅行の目的は以下のように記されている。¹³⁾

現下欧亚横断の要路と目さるゝは云ふ迄もなく、一は西伯利亚鉄道を経由して欧洲に出づる陸路と、他は新嘉坡を過ぎ印度洋を経て欧洲に至る海路との二線であるが、前者は北に偏し、後者は南に偏し両者の間相隔る幾千里、共に横断と云はんよりは寧ろ亜細亜大陸の周囲を迂回する交通路たるに過ぎない。（中略）欧洲戦前に於ては白耳義シンチケートに依て支那本部横断鉄道たる海蘭鉄道を延長し、甘肅、新疆を経て露領の既設鉄道たる中央亜細亜線に聯絡せしむべく計画されて居たが、欧洲戦乱の爲めに行悩みとなつて了まつた。併し這は人文の発達に依りて当然論議さるべき問題であると共に、将来必ず具体化さるべき性質の懸案である。（中略）従

つて未設沿線に対する予備知識が必要であると同時に、実地見聞の要及び他日形勢動搖の因となるべき所以のものを究め置くの要に迫まれて居るのである——と斯う云ふ趣旨が動機となつて、私は這回未開大陸横断の旅行を企てたのであるが、夫れに就いては現状未開地としての該地方の政治的地位並に経済的価値も知り度かつたのは勿論である。

当時、アジア・ヨーロッパ横断のためには、シベリア鉄道による陸路と、シンガポール、インド洋を経由する海路があつた。中央アジアを最短で渡る鉄道敷設のための調査とはいつても資金援助のための名目であつて、実際には探検家の浪漫精神による大陸横断の旅であつた。この大陸浪人の馬車には日章旗が立てられていたという。時には漢詩を詠じ、月を眺めては愛好の尺八を吹奏しつつも、荒涼とした砂漠をも横切る旅は壮絶な体験の繰り返しであつたようだ。大正一四年九月、イスタンブールに到着し、翌年一月にはインド洋を迂回して天津に帰着したが、同年六月には心臓麻痺で大連にて三十一歳で死去。波乱万丈の短い人生であつた。

彼の旅日記は死後多くの読者を得たという。これまでに判明している記事・著作を年代順に並べてみる。

- ・「中亜縦貫鉄道の要路 新疆地方事情(1)」（「満蒙」 大正一五年六月）
- ・「中亜縦貫鉄道の要路 新疆地方事情(2)」（「満蒙」 大正一五年八月）
- ・『中央亜細亜横断日記』（副島次郎研究会、大正一五年）
- ・『アジアを跨ぐ』（大阪毎日新聞社、昭和二年一月）

- ・『アジアを跨ぐ』（大道社、昭和六年六月）
- ・『アジアを跨ぐ』（言海書房、昭和一〇年八月）
- ・石原巖徹編『副島次郎の中央亜細亜横断』（満洲日日新聞社、昭和一五年一月）
- ・満鉄・弘報課編『亜細亜横断記』（満洲日日新聞社東京支社出版部、昭和一七年五月）

「旅人」の副題「副島次郎中央アジア横断日記による」から、蔵原伸二郎は大正一五年刊行の『中央亜細亜横断日記』を読んでいた可能性が高いが、同書は私家版と推察され、発行月も不明である。昭和二年刊行『アジアを跨ぐ』の「序」に「遺稿一度大阪毎日紙上に現はれるや、百万の読者為に糾然として靡いたのは全く彼の大和魂が然らしめた」と記されているように、大正末頃に旅日記が新聞連載され評判となり単行本となつたことが分かる。⁽⁴⁾昭和六年刊行の大道社版には、「本書の編纂体様は副島君の死後、其友人宮野庄之助氏等の手によつて出版されたる中央亜細亜横断旅行中の日記を以て之を一貫し、其方面に入りたる調査報告を、日を逐ふて日記の間に地理的に組合せる方法に拠つた」とあり、昭和二年版を大幅に追補したもので、ほぼ完全版といつてよいだろう。⁽⁵⁾蔵原伸二郎が初発表までのどの時期にどの版を読んでいたのかは明確ではないが、ちょうどこの頃は、詩から小説へと活動のジャンルを移した時期と重なっていることに留意したい。叙事詩風「旅人」誕生前の活動期、つまり大正一四年から昭和一〇年頃までの発表作品は、「コギト」に再録された『東洋の満月』⁽⁶⁾ 関連詩をのぞいて、短編小説やエッセイ等の散文で、詩作からは遠ざかつていた。

竹長論では戦後の「砂漠」の最終部「旗がひゅうひゅうとたえ

ず 砂嵐に鳴っていた／それは日本のふる里の古い笛の音であった／それは故郷に残した母の声であった／このたびとは／ついに帰らなかつた」を引き、最後の三行について次のように述べている。

戦後の「砂漠」では、別の三行が付加された。この三行が、中央アジアと阿蘇との結び付きを決定的なものにしている。つまり、蔵原は「砂漠」において、「笛の音」を「故郷に残した母の声」とつなげることによって、故郷の阿蘇へ帰っていったとしたのである。

「阿蘇との結び付き」を全く否定はしないが、この詩の場合「故郷」と詩人自身の故郷阿蘇を直接結び付けるには論拠が乏しく強引と思われる。尺八を好んだ副島次郎をモチーフとした叙事詩と読む方が自然である。竹長論は最後に「砂漠」が『定本岩魚』から削除された理由について、「旅人のイメージは、蔵原自身というより、依然として副島次郎の方が強い。彼としては精一杯手を加えてみたのであろうが、それはどうしても払拭できなかった」からだと述べている。「阿蘇との結び付き」よりも、実在の副島次郎をモチーフとした詩からの昇華が不完全であったという指摘の方が重要である。

なお、副島次郎の著作は、先に示したように初出作成期にも再版されているが、その出版事情については後述することとしたい。

先述のように「旅人」は、その後は副題が削除され、『岩魚』には「砂漠」と改題されて所収となった。副島次郎の個人名は「旅人」関連詩からは完全に消えるが、副島次郎自身がモチーフ

となつている詩「志士の歌」がある。竹長論でも指摘されているように、「砂漠」（「旅人」と「志士の歌」との関連は深く、戦時下における蔵原伸二郎の浪漫的詩精神と、大岡信がいう「奇妙な屈折」を追究するうえで極めて重要である。

「志士の歌」関連詩の書誌を示す。

・『志士の歌』「一 志士」「二 哈密を過ぐ」「三 大石頭にて」

（『新潮』昭和一四年七月）

・「志士の歌」「哈密を過ぐ」「天山を越ゆ」（『現代詩集 第一巻』河出書房、昭和一四年一二月）

・『志士の歌』「I 志士」「II 哈密を過ぐ」「III 大石頭にて」（『戦闘機』鮎書房、昭和一八年七月）

初出「新潮」と『戦闘機』では、『志士の歌』章題下に三篇の連作という構成で、大きな異同はない。『現代詩集』版のみ章題がなく、また「大石頭にて」が「天山を越ゆ」と入れ替えられている。

初出から「一 志士の歌」を引く。¹⁶⁾

一 志士

かつて平和なとき

一人の志士は北京から包頭をすぎ

磧石の悪路を

もの凄いゴビの砂風吹に病んで

天山北路を指して行つた

かれは日本でダンスが流行してゐるのを聞いて上告書を作つ

た

た

砂漠の中に彼は思ひがけない豊饒な沃野があるのにおどろいた
 こんな奥地に西洋の都会があるのを見た

整然とヨーロッパに連る電柱と道路をみた

ヨーロッパよりの路が外蒙に迄伸びてきてゐるのを見た

蒙昧のアジアがこの牙のある道によつて喰はれつつあるのを

しつた

かれは汚ない旅舎で水ばかり飲んで寝てゐた

そこでは中央亜細亜の諸民族がただ不思議な古い信仰によつて生きてゐるのを見た

砂漠に開花した古代の美しい思想はもはやどこにも見られな

かつた

老獺な赤色ロシアと陰険な支那の特権が互ひにいがみ合つて

ゐた

かれは一万数千尺の大雪山が紫色をして天に輝いてゐるのを

見た

かれは亜片密売者に化けて露領に入らうとして失敗した

かれが病める身体を支えて再び北京に帰つてきたのは二ヶ年

の後であつた

かへると間もなくかれは一冊の短い旅日記をのこして死んだ

その中で彼は次のやうに叫んでゐる

「民族は永久に相和すべからざる事を知つて居れ。

国境はなくなる時節があつても黄白黒の色分けは無くならな
 い。

而して競争や闘争は人間の本能だ。

世の人間がすべて聖人であつたら兎も角なり。鉄砲で戦争せ

ずとも算盤で戦争する。

自ら世界一の優秀民族を以つて任じ且つ行はずしてどうする
 か。」

彼の名は副島次郎

大正十五年六月二日大連の客舎に急死す

行年三十歳なり。

副島次郎の旅日記や事実に即した叙事詩的な作風である。実在の人物とその著作をモチーフにした詩は、蔵原伸二郎の詩歴のなかでも珍しい。『東洋の満月』に見られた野性や本能を重視する思考と通じるものがあつたとも考えられる。

この詩で重要なのは、〈競争や闘争が人間の本能〉であり、〈世界一の優秀民族〉であることを引用の形で述べていることである。⁽¹⁷⁾ また、この詩が『東洋の満月』（生活社、昭和一四年三月）刊行後、ほぼ同時期に発表されていて、翌年に初出「旅人」が発表されていることにも留意しなければならない。当時の中央アジアへの憧憬は、「旅人」から「砂漠」への過程と、昭和一四年から同一五年にかけての所謂戦争賛美への過程との二つの道筋への分岐を示しているともいえる。この「志士の歌」には、大岡信のいう「奇妙な屈折」が明確に表れている。

『現代詩集』の「天山を越ゆ」では、「大石頭にて」に書かれているような叙事詩風のものが見られず、戦時下の詩風が顕著である。⁽¹⁸⁾

天山を越ゆ

壯士あり名は副島

病軀を蒙古馬に托して辺境に志せり

朔風砂塵を巻いて

ために天日暗澹たるを

いくたびか砂場に眠り

いくたびか馬背に病む

路やうやく砂礫の地を過ぎれば

天山の北路にかり古城子に到る

馬上はるかに南方を仰げば

二万尺のボクトーラ山衆峰を制して高く

積雪の尾根はひとり紫色にして

雲外に突兀たり

馬夫これを指して曰ふ

汝看那一個是天下の第一山と

かれ死してすでに十有五年

いま昭和十四年七月なり

ハルハ河畔に敵屍累々として

皇国の威武また遠く辺塞を圧す

壯士よ幸ひに地下に瞑せよ

現段階の調査において、この「天山を越ゆ」は初出不明であり、単行詩集および他のアンソロジーにも収録されていない。『現代詩集』のための書き下ろしと思われる。拙著『蔵原伸二郎研究』で、昭和一二年一〇月「四季」に発表された「撃滅せよ」を、急角度で戦争へと傾斜する、変化の指標となる作品だと述べた。⁽¹⁹⁾「かくてわれらはつひに立上つた／われらの血脈は憤激した／かの蒙古の沙漠に／天山の麓に／居庸関の嶺に／祖先の神々の前に

／蒙古民族の純血の中に／ああ われら民族よ すべて銃をとれ（後略）」ではじまる「撃滅せよ」の慷慨する詩精神は、「天山を越ゆ」の〈壯士〉副島次郎の中央アジアの〈沙漠〉横断の旅と結び付けられていると考えられる。

実際には副島次郎の旅は、浪漫的冒険心によるもので、現地民族との交流や自然の風景等も記されている。調査目的のため日本軍の資金援助は受けていても、植民地支配と直結するものではなかった。蔵原伸二郎の副島次郎への関心も、詩「旅人」においては、大陸横断をする〈旅人〉への純粹な憧れであったと解される。だが、その冒険心の一部は、時代の趨勢とともに〈旅人〉から〈志士〉へと「屈折」し始めたのである。

四、詩「崑崙」と副島次郎

『定本岩魚』編集の際、『岩魚』から「沙漠」とともに削除された詩に「崑崙」がある。

現段階の調査では雑誌発表は確認されておらず、昭和一五年九月刊行『現代詩人集5』に〈崑崙〉を章題として「崑崙」「乾いた路」「貝塚」の三篇が収められているのが最初である。この章題の下に蔵原伸二郎の当時の心境が書かれた文章がある。これで見落としていた資料の一つでもあるため、全文を引いておく。⁽²⁰⁾

自分は残念ながら未だ天候や季節などによつて自分の觀念や思考を左右される。既に確固不動の精神を持ち得たかに思つてゐたが、あくそれは世にも阿呆らしい間違ひであつた。ふらふらした性格、この激流の中にあつて、いたづらに焦燥不安するこの貧しき靈魂。

この日、前夜までの霧の多い温暖の空気は早朝より急変して、ひどく乾燥した疾風が、ひゆうひゆうと木の葉を打ちふるつた。木の根たちはこの突然の寒気にすくみ上り、自ら適応するのに苦しみ喘いでゐた。鳥どもはまだ冬仕度の間に合はない羽をふくらまして、ひどく不機嫌になつてしまつた。母なる大地も乾いてカサカサの肌をしてゐる。人間である自分迄がこんな乾いてしまつて悲しいかぎりである。嘆息しながら自分は詩を書いた。

引用傍線部でも、昭和一五年当時、彼が混迷と苦悩のなかで詩を書き続けていたことがわかる。以下、現段階で判明している書誌を示す。

- ・『崑崙』崑崙（『現代詩人集5』山雅房、昭和一五年九月）
 - ・「崑崙」（『コギト詩集』山雅房、昭和一六年六月）*「旅人」の次
 - ・「崑崙」（『戦闘機』鮎書房、昭和一八年七月）*《志士の歌》章題下三篇の次
 - ・「崑崙」（『現代日本文学全集89 現代詩集』筑摩書房、昭和三六年十一月）
 - ・「崑崙」（『岩魚』詩誌「陽炎」発行所、昭和三九年六月）
- *「砂漠」の前

表記や改行の変化はみられるが、いずれも「砂漠」（「旅人」と同様、詩の内容に関わるような大きな異同は見られない。ここでは、*で示したように「崑崙」収録の際、「旅人」「砂漠」「志士の歌」の前後に置かれていることに留意し、副島次郎を直接示

す詩句はないものの、本稿では「崑崙」もまた副島次郎関連詩として取扱ひ、考察する。⁽²¹⁾

崑崙

北すれば不毛の曠野、ゴビの砂漠
西すればオールドス地方、天山の南路
タクラマカンを越ゆれば、コンロンの麓
珍奇な宝石のごろごろしているところ
魂は駱駝にまたがり
無限の砂蹟を歩み
白象の如く
永遠の氷河を渉る
青や黄やあまた善悪の龍住むというコンロン
コンロンには常に五彩の雲湧き起り
飄々と匂う風が過ぎる
あまた怪獣を養い
あまた異類の植物、昆虫を育てるコンロン
ああ、夢に見る月夜のコンロン
わが現実の思念を越えて
遙か天空によこたわり聳ゆるコンロン
印度におこり
新疆をよぎり
青海に入り
四川に至るコンロン
コンロンは今
漠々たる雲上にありて

怪花競い咲かんか

孟夏陶々たり、草木莽々たり

願わくば われ

コンロンに行きて

新らしき世界の夜明けを見ん

〈崑崙〉は、中国古代の伝説上の神山で、中国の西方にあり、黄河の源で玉を産出すると伝えられている。一般的にいわれる「崑崙山脈」は、中央アジア地域にある新疆ウイグル自治区タクラマカン砂漠の南、チベットの北部、中国の西部にある実在の山脈のことをいう。⁽²²⁾

この詩の前半でも〈珍奇な宝石のころころしているところ〉、〈青や黄やあまた善悪の龍住むというコンロン／コンロンには常に五彩の雲湧き起り／飄々と匂う風が過ぎる／あまた怪獣を養い／あまた異類の植物、昆虫を育てるコンロン〉と、神話的な場所として描かれている。一方、後半部では、コンロンの〈印度におこり／新疆をよぎり／青海に入り／四川に至る〉地理的な場所が具体的に示され、〈漠々たる雲上〉の〈コンロンに行きて／新らしき世界の夜明けを見ん〉と、大陸への憧憬がうたい上げられている。

この〈新らしき世界〉は、『東洋の満月』の詩世界を象徴する〈幻想的リアリズム〉に通じるものである。少なくともこの詩には植民地支配的な意識は認められない。副島次郎関連詩として読めば、読書体験からイメージされた浪漫的な「旅人」（「砂漠」）に連なる詩世界と考えられる。

拙稿「蔵原伸二郎『東洋の満月』再論」でも、彼の中国や蒙古関係の読書体験について検証した。⁽²³⁾ 蔵原伸二郎の大陸への浪漫的

憧憬は『成吉思汗實録』のチンギス・ハーンとともに、詩作を始めた当時の実在の人物の年代記や探検記に起因していたと考えられる。本人は直接言及してはいないけれども、同郷の熊本出身の石光真清の『諜報記』（育英書院、昭和一七年二月）等を読んでいた可能性も否定できない。⁽²⁴⁾

戦後すぐに出された『暦日の鬼』（麒麟閣、昭和二一年七月）の題字には、「詩と散文」と冠せられている。阪本越郎は「戦後の沈痛な現実に取材したものが多く」、「彼は昭和十七年に大東亜省派遣視察団員の一人として、満州に渡った経験があり、その紀行などが散文の部に含まれている」と解説している。⁽²⁵⁾ 三十六篇の詩と六篇の散文から構成されているこの詩集に、「沙漠」という詩がある。⁽²⁶⁾

沙漠

タクラマカンの沙漠は

コンロンの北、天山の南、

西海の西、パミールの東にあり。

南北の横断に約二十日を費すべく、

東西またそれに等し。

万古の時を経て、今に至れども、

つひに一木の生ゆるなく、一草なく、

寂として鳥獣の影だになし

一望、千里、雲と砂丘なり。

幾万年の間、ただ単調に、

砂丘は崩れ砂丘は起つた。

山あれども土の山なく

河あれども水の河なし

雲と砂、雲と砂。

時に 白龍のいかれるがごとく

砂丘は天に舞ひ上る。

阪本越郎は、「タクラマカン沙漠に、原始のままの寂寥を想つた詩である」、「この沙漠の荒涼とした砂と雲の大きな風景は（中略）彼が実際に見聞したものでなく、おそらく想像の産物であろう」と述べている。⁽²⁷⁾この詩の〈コンロン〉は地理上の説明に使われているが、伝説のイメージが混在しているといえるだろう。

散文「興安嶺の野火」には「今日のハルピンの持つ文化的生活は、最早過去のものでしかない。そのハルピンを立てて十数時間で国際列車は大興安嶺を越ゆる。興安嶺は満洲平野とホロンバイル平原を、境するところの、丘陵性のしかも雄大なる山脈である。ここを越ゆれば満洲の面貌は更に一変する。一望千里の沙漠性原野にはどこを見ても人家のあるなく、耕地なく、樹木なく、千頭数に及ぶ馬牛羊の大群が、馬に乗つた只一人の蒙古少年の長い鞭に随つて動いてゐるだけである。尚更に遠く大地の天と接するあたり蜿蜒数百キロにわたるであらう。野火が数十日となく燃えつづけてゐる壯観は、まさに筆舌の外である。」と、満州での見聞が綴られている。⁽²⁸⁾〈沙漠〉・〈砂漠〉への関心は『東洋の満月』から『岩魚』まで詩と散文のジャンルを超えて一貫しているようだ。詩を書き始めた大正一二年には実兄惟邦宅の上海を訪ね、その後も上海から漢口へ渡り、昭和一二年にも上海の博物館、漢口の黄鶴楼を見物している。しかし、彼の意識は、訪れたことのない〈タクラマカンの沙漠〉からさらに西域へと向つている。

『暦日の鬼』所収詩「沙漠」の次には詩「天下雄関」「燉煌」

が続く。前者には〈長城の東端に山海関があり、／西の果に嘉浴関がある。／昔は更に西に、玉門関、陽関があつた。／嘉浴関は、青海の北、内蒙の南、／かの有名なトンコーに近く／中央アジア西域への入口である。〉、後者には〈燉煌は西海省の西北部／新疆省に近いところにある。／砂磧岩からなる丘陵の骨に／無数の洞穴を掘つて／何千といふ美しい仏像や壁画がある。／（中略）／雲崗の石仏、熱河の万仏堂、／慶州、百済の仏像／わが大和の法隆寺—／その項の仏教は新しい光明であつた。／満月であつた。／東洋の満月であつた。／今の世の仏教よりずっとずつと有難いものであつた。／貧しい人達の生命と生活とを守る力があつた。／だからあんなに美しい仏像が刻まれたのだ。〉とある。⁽²⁹⁾地理上の地名をあげつつ、未知の地でありながらも、文化・芸術・宗教の通路となつた崇高な地として敬意を表している。これらの詩には侵略的な発想は認められない。阪本越郎は「燉煌」について次のように述べている。⁽³⁰⁾

仏教が西から東へ伝来した時の、最初に出来た雄大な寺がこの燉煌の石窟寺群であつて、仏教はここを通つて、中央アジア山脈を越え、朝鮮半島を経てわが国に渡来した。

その華麗な仏画、仏像を思うことによつて、詩人は、「新しい光明」がこの世にあつた往昔を回想し、その感動を「東洋の満月」ということばで表現し、その時代の壮大な夢に浪漫的憧憬を燃やしたのである。

シルクロードの要衝として栄えた燉煌は、西方から〈タクラマカンの沙漠〉を越えてくる旅人にとってはオアシスであつたとい

う。「旅人」(「砂漠」)、「志士の歌」等とこれらを関連させてみれば、「未刊詩集『狼』」が那珂通世訳注『成吉思汗實録』に直接影響されたように、(「東洋の満月」という詩句が探検記等の読書体験から想起されたものとして浮かび上がってくる。

五、「戦争詩人」としての受容とその背景

以上、蔵原伸二郎の詩精神が分岐していく過程を、副島次郎関連詩を視座に考察した。彼は長く「戦争詩人」のレッテルを貼られた詩人のひとりである。彼の戦時下の詩には良質の抒情詩も多くあるが、いわゆる慷慨詩が広く受容されたことについては、副島次郎関連書や、『成吉思汗實録』が、戦時下で意図的に再版された事情をもあわせて検討してみる必要がある。

副島次郎の著作は、先に記したように戦時下において少なくとも二度再版されている。

石原巖徹編『副島次郎の中央亜細亜横断』(満洲日日新聞社、昭和一五年一月)では、「本書は大道社発行「アジアを跨ぐ」を底本とし、これに編者が直接副島次郎氏から聴取したところを加えて、重点主義に依り簡略に書き改めたものである。従つて文責は編者に在る」と、凡例に記されている。また「踏査各地事情」についても「伊犁及び中央アジアの部分の詳細にしたが、これは複雑な民族関係と、蘇聯の侵略情況を知るために今日に於ても充分生きてゐる貴重な資料」として収録されている。なお、大道社版を「底本」としながらも、本文は冒頭から「皇紀二千五百八十四年、即ち大正十三年の一月元日」と大きく改変され、あくまでも石原巖徹自身の意図的な文章となっている。⁽³¹⁾

さらに満鉄・弘報課編『亜細亜横断記』(満洲日日新聞社東京

支社出版部、昭和一七年五月)は、第一部を福島安正「単騎遠征録」とし、第二部に石原版をそのまま「中央亜細亜横断記」と題して収録したものである。福島安正は日露戦争では満州軍総司令部参謀をつとめ、その後陸軍大将となった人物で、明治中期にシベリア単騎横断を行ったことで広く知られている。以上の二書の出版事情から、この時期の副島次郎の著作の再版は、一般庶民の戦意高揚を目的とするものであったといえるだろう。

また、「未刊詩集『狼』」を母体とした『東洋の満月』についても同様のことが言える。「(狼)詩篇」には歴史上の人物チンギス・ハーンという中世の覇者のイメージが色濃く付帯していることは拙稿で述べた。⁽³²⁾ 蔵原伸二郎が愛読した那珂通世訳注『成吉思汗實録』は、昭和一八年九月に筑摩書房から再版される。門弟の有高巖は「本書は、初版僅に数百部に限定されてゐたものと見え、出版後兩三年にして早くも店頭姿を没し、世の篤学者をして披閱の難を嘆ぜしむるもの年既に久しく、近時偶々古書肆の目録に発見することあるも、数十金を投ぜざれば入手し得られない程の貴重なものとなつてゐる。時局下蒙古研究の益々勃興せる際、筑摩書房の奉仕的出版に依り、茲に本書の再版を見るに至つたのは、真に学界の慶事である」と、戦時下の再版事情について述べている。⁽³³⁾ 同年、尾崎士郎は、児童書『成吉思汗物語』(偕成社、昭和一八年九月)の「序にかへて」に次のように記している。⁽³⁴⁾

蒙古の人たちは日本人にたいして、たいそうしたしみをいだいてをり、支那事変がはじまると、蒙古の人々は日本軍と協力して、とくいの騎馬戦やその他で大いに蒋介石軍をやつつけましたし、ことに大東亜戦争がはじまつてからは、満洲国や中華民國とともに手をたづさへ、日本をたすけてたいそう

力づよい団結ぶりをみせてゐます。——これからも、いつそう日本を親とも兄ともしたつて、東亞の新しい建設のため、世界のほんたうの平和のため、こころをつくしてすすむことと信じます。

詩集『東洋の満月』の〈狼〉が「東方の狼—東洋の満月・序詩」(『若草』昭和一二年二月)へと変化していったように、時流を背景に、詩人・蔵原伸二郎の副島次郎像も〈旅人〉から〈志士〉へと傾斜していったのだと考えられる。³⁵⁾

一方、読者側においても、『戦闘機』(鮎書房、昭和一八年七月)、『天日の子ら』(湯川弘文社、昭和一九年三月)、『旗』(金星堂、昭和一九年三月)等の所謂「戦争詩集」に、優れた抒情詩が含まれてはいても、慷慨詩の方が受容されるようになったのではないだろうか。詩人自身の変容もさることながら、読者層も変化しており、蔵原伸二郎が「戦争詩人」として受容されたことにについては、当時の出版事情をふまえ、書き手と読み手の相互作用に留意する必要がある。

六、終わりに

副島次郎関連詩を視座に、蔵原伸二郎の詩精神の軌跡を辿りつつ、「戦争詩人」への「奇妙な屈折」とその背景について考察した。

蔵原伸二郎は「読売文学賞受賞の言葉」(『読売新聞』夕刊、昭和四〇年二月五日)の中で「全体の配列とか、バランスとかにあまりこだわらないで、なにげなく二十年も前の詩なども入れてしまったことなど、受賞してみると、この不体裁をなんとも残念に

思っています。これはまったく私自身の落ち度で、もし『岩魚』が再版される機会があれば、その部分は除いて出版したいと思っております。」と述べている。死後、この遺志により『定本岩魚』からは「砂漠」も「崑崙」も削除された。だが、『定本岩魚』ではなく、『岩魚』を底本とすることで、〈東洋〉に憧れる浪漫的詩精神は一貫して晩年まで引き継がれていることが明らかとなった。

《狐》章の最後の詩「野狐(やこ)」には「砂漠」と同じように〈旅人〉が登場する。³⁶⁾

さびれた白い村道を歩きながら

旅人はつぶやいた

「生きながら有限から抜け出そうなんて、

それはとうてい不可能なことだ」

かつて実在の孤高の旅人をうたった浪漫的叙事詩は、戦時下での屈折の後、戦後の長い沈黙期を経て、生と死、有限と無限について思索する哲学的抒情詩へと昇華している。遺品のノートには、「事物に対抗できるのは精神だけである。／まっすぐ事物に直進してもはねかえされるだけだ。／それ故形而上学と事物の関係の研究が大切である／感覚は一つの道具のみ／一九六三、十二、十七日／蔵原」と書きつけられている。³⁷⁾この署名入りで朱書きされた文字は、自己と宇宙との相対化による形而上学的詩世界『岩魚』に至る足跡ともいえる。晩年に到達した蔵原伸二郎の高次の詩境は、詩論集『東洋の詩魂』(東京ライフ社、昭和三十一年二月)で展開された詩学に基づいたものである。

自己と〈事物〉との関係を追究する思考方法の構造は、リルケ

の影響を受けた丸山薫や村野四郎等、同時代の詩人達にも通じている。³⁸⁾ 彼等との比較をとおし、昭和詩の詩学生成の過程について考察することを今後の課題としたい。

注

- (1) 岩本晃代『蔵原伸二郎研究』（双文社出版、平成一〇年一〇月）の第一章〜第三章参照。
- (2) 大岡信「詩人の肖像」（『日本の詩歌24』中央公論社、昭和四三年一〇月、四一三頁〜四一四頁）。
- (3) 岩本晃代「『東洋の満月』再論―「未刊詩集『狼』と那珂通世」注『成吉思汗實録』との関係を視座にして」（『崇城大学紀要』第四〇巻、平成二七年三月、一九頁〜三〇頁）。
- (4) 石坂洋次郎はこの「ある詩集」（『別冊文藝春秋』昭和四一年三月、五〇頁〜五九頁）で「私が、このごろ、自分は作家としても人間としても、大地に足跡を残さない生き方をして来たと、改めて感じさせられたのには一つの動機がある。それは、私と慶応義塾の文科の同期生であった故蔵原伸二郎の詩集定本『岩魚』を読んだことである。」と書き、「背中をどやされるようなショックに打たれた」とまですべて書いている。
- (5) 前掲書『蔵原伸二郎研究』の第三章第三節「『岩魚』の世界」参照。
- (6) 『岩魚』（詩誌「陽炎」発行所、昭和三九年六月）の「後記」（九〇頁）に拠る。
- (7) 前掲書『岩魚』（七六頁〜七八頁）に拠る。
- (8) 原文は「ここには一度も雨がふらなかった」（七七頁）である。誤植と思われる。
- (9) 竹長吉正「蔵原伸二郎『砂漠』の素材と意図」（『解釈』昭和五五

年一〇月、五二頁〜五八頁）。竹長論の引用は、すべてこの論に拠る。

- (10) 他に同様の詩として「乾いた路」や「貝塚」等がある。詳細は前掲書『蔵原伸二郎研究』の「資料編」を参照。
- (11) 『乾いた道』（薔薇科社、昭和二九年五月、一一頁）に拠る。
- (12) 田中克己「『ユギト』の思い出」は『現代詩鑑賞講座 第一〇巻 現代の抒情』（角川書店、昭和四四年一月、四四三頁〜四五二頁）所収。引用部は、四四七頁。
- (13) 副島次郎『アジアを跨ぐ』（大道社、昭和六年六月）所収の「予が旅行の目的」（二頁〜四頁）に拠る。
- (14) 引用は、昭和二年版の金子定一「序」（二頁）に拠る。
- (15) 引用は、昭和六年版「凡例」（二七頁）に拠る。なお、『アジアを跨ぐ』（言海書房、昭和一〇年八月）は、大道社版と中身は同じもので、戦後に出版された陳舜臣編集・解説『アジアを跨ぐ』（白水社、昭和六二年二月）も大道社版を底本としている。
- (16) 「新潮」昭和一四年七月（九四頁〜九六頁）に拠る。
- (17) この引用部分の出典は現時点では判明していない。昭和二年版『アジアを跨ぐ』以降のものには見当たらないため、未見の大正一五年版『中央亜細亜横断日記』の本文の可能性が高いと思われる。なお、「新潮」（昭和一四年七月）と『戦闘機』（鮎書房、昭和一八年七月）所収の詩「大石頭にて」にも副島次郎の旅日記からの引用があるが、それは昭和六年版以降の版において、大正一三年五月一日の日記文と一致する部分がある。
- (18) 『現代詩集 第一巻』（河出書房、昭和一四年一二月、二五六頁〜二五七頁）に拠る。
- (19) 前掲書『蔵原伸二郎研究』第二章第一節参照。「撃滅せよ」の引用は『東洋の満月』（生活社、昭和一四年三月、一三八頁〜一四〇

頁)に拠る。

- (20) 北川冬彦編『現代詩人集5』(山雅房、昭和十五年九月、一八五頁〜二〇五頁)に蔵原伸二郎《崑崙》章題下三篇がある。引用部は、一八五頁に拠る。

- (21) 前掲書『岩魚』(七二頁〜七四頁)に拠る。

- (22) 曾布川寛『崑崙山への昇仙』(中央公論社、昭和五六年一月)を参考にした。

- (23) 注(3)に同じ。

- (24) 石光真清(明治元年〜昭和一七年)は、熊本に生まれた。少年期に神風連の乱や西南戦争の中で過ごし、明治一六年に陸軍幼年学校、同一九年には陸軍士官学校に入学。日清戦争で陸軍中尉として台湾に出征、帰国後、同三二年にはロシアに渡る。日露戦争後は東京世田谷の三等郵便局長として勤めた。大正六年、ロシア革命後、シベリアに渡り諜報活動を行った。『諜報記』(育英書院、昭和一七年二月)は、編者記に拠れば「石光真清諜報手記草稿三千余枚中より、自明治三十三年、至三十七年の部分を更に抜萃したるもの」(七頁)であるという。陸軍少将・菊池武雄は「解説」に、「一切の打算を捨てて、一以てこれを貫く心、この誠、この赤心、茲に日本人の真面目がある。学ぶべきは君国のために無名に死すこの赤心である。皇統二千六百年の歴史はかくして作られた。明治大正の歴史また然り。昭和聖代の皇国民がこれに劣るべき筈はない。読者若しここに心を致されるならば、本書出版の意義もまた達せられる次第である。」(六頁)と述べている。なお、石光真清が残した手記は、長子真人によって、龍星閣から『城下の人』(昭和三十三年六月)、『曠野の花』(昭和三十三年七月)、『望郷の歌』(昭和三十三年一〇月)、『誰のために』(昭和三四年一月)の手記四部作としてまとめられ、第十二回毎日出版文化賞を受賞した。『曠野の人』は『諜報

記』をもとにして、「当時の社会情勢から発表を憚られた部分と脱落していた部分を新たに追補して、全面的に再整理したもの」(『曠野の花—石光真清の手記 二』(中央公論新社、昭和五三年一月、六頁)だという。

- (25) 阪本越郎「鑑賞」(『日本の詩歌24』中央公論社、昭和四三年一月、三四〇頁〜三四一頁)に拠る。

- (26) 『暦日の鬼』(麒麟閣、昭和二年七月、一二八頁〜一三〇頁)に拠る。「砂漠」と「沙漠」は別の詩であり、『東洋の満月』所収の「沙漠」とも内容は異なる。蔵原伸二郎の詩において、詩句「砂漠」と「沙漠」の使い方の統一性は見られない。

- (27) 前掲書『日本の詩歌24』(三四六頁〜三四七頁)に拠る。

- (28) 引用は、前掲書『暦日の鬼』所収の「興安嶺の野火」(一二〇頁〜一二三頁)に拠る。

- (29) 「天下雄闊」「燉煌」は、前掲書『暦日の鬼』(一二一頁〜一二三頁)所収。

- (30) 前掲書『日本の詩歌24』(三五〇頁)に拠る。

- (31) 石原巖徹編『副島次郎の中央亜細亜横断』(満洲日日新聞社、昭和十五年一月、一頁)に拠る。

- (32) 注(3)に同じ。

- (33) 那珂通世訳注『成吉思汗實録』(筑摩書房、昭和一八年九月)の「成吉思汗實録の序」(四頁)に拠る。

- (34) 尾崎士郎『成吉思汗物語』(偕成社、昭和一八年九月、七頁〜八頁)に拠る。

- (35) 〈狼〉をモチーフとした詩篇の変化については、注(3)の拙稿参照。

- (36) 前掲書『岩魚』(二四頁)に拠る。引用は、冒頭部のみ。

- (37) 平成九年八月一八日、蔵原伸二郎のご長男、故蔵原惟光氏から筆者岩本に届けられた蔵原伸二郎の大学ノートの第一頁に書かれてい

たもの。昭和三八年一二月一七日付と推定される。前掲書『蔵原伸二郎研究』の写真参照。

(38) 岩本晃代『昭和詩の抒情―丸山薫・(四季派)を中心に』(双文社出版、平成一五年一〇月)、同「モダニズム精神の軌跡―リルケの事物詩受容を中心に」(『日本近代文学』第76集、平成一九年五月)参照。なお、蔵原伸二郎『東洋の詩魂』(東京ライフ社、昭和三一年二月、一六四頁)にも、リルケが「現象と実在の裏側を知り、実在するものの四次元的状態とその内部と外部の秘密な関係を知」る詩人としてあげられており、リルケの受容は明らかである。

引用文等については、原則として旧字体は新字体に改め、仮名遣いは原文どおりとした。

